中学校

平成7年度

教育研究員研究報告書

特別活動

東京都教育委員会

平成７年度

教育研究員名簿（特別活動）

分科会名	区市町村名	学校名	氏名
第一生徒分科会 科活動	江東	亀戸中学校	藤田　勝
	品川	城南中学校	阿部仁明
	杉並	荻窪中学校	馬場　誠
	葛飾	双葉中学校	◎ 福永通明
	江戸川	篠崎第二中学校	峯　忍
	小金井	緑中学校	上田忠之
	田無	田無第一中学校	浜田敏幸
第二学級分科会 科活動	大田	糀谷中学校	○ 前田　浩
	世田谷	芦花中学校	加藤祐志
	板橋	西台中学校	木下和浩
	練馬	光が丘第四中学校	中村和家
	足立	花保中学校	根本幸男
	八王子	城山中学校	大川武司
	狛江	狛江第二中学校	出村維津子
	あきる野	秋多中学校	石川秀一

◎ 世話人　○ 副世話人

担当　教育庁指導部主任指導主事　山本修次

研究主題

生徒が主体的に活動し、互いに高めあえる特別活動

目　　次

Ⅰ　主題設定の理由 …… 2

Ⅱ　第１分科会『生徒会組織間の有機的な連携を図り、生徒一人一人の意欲を高める指導の工夫』

1　副主題設定の理由 …… 2

2　研究の内容 …… 3

(1)　研究構想図 …… 3

(2)　アンケートの結果と分析 …… 4

(3)　委員会組織間の連携の工夫 …… 5

(4)　実践例

ア．体育委員会 …… 6

イ．生活委員会 …… 8

ウ．放送委員会 …… 10

エ．本事例での活動に対する生徒の感想 …… 12

3　研究のまとめと今後の課題 …… 13

Ⅲ　第２分科会『生徒が創意を発揮し、主体的に取り組む、魅力ある学級活動の工夫』

1　副主題設定の理由 …… 14

2　研究の内容 …… 14

(1)　研究構想図 …… 14

(2)　学級活動に関する生徒、教師の意識調査と考察 …… 15

(3)　グループ単位での学習、発表などを取り入れた学級活動の指導計画と実践例 …… 17

(4)　授業研究の実践と成果 …… 20

(5)　今回の学級活動の成果と生徒の変容 …… 22

3　研究のまとめと今後の課題 …… 24

研究主題

生徒が主体的に活動し、互いに高めあえる特別活動

Ⅰ　主題設定の理由

流動的で変化の激しい現在の社会の中で、今教師の指導に求められているものは、人間性豊かな心を育み、主体的に物事を考え、学び、行動しようとする資質や能力、態度を身につけさせることである。

しかし、現在の生徒をみると、受け身的に物事を考えたり、自分だけよければという価値判断で行動することが少なくない。その背景には、自分の興味、関心は何か、自分はどうあるべきか、友人との関わりの中で学級・学校生活をどう充実していくかがわからないのではないかということが考えられる。

したがって学校では、生徒の興味、関心を深め、活動意欲を育てるとともに、友人との人間的な触れ合いの中で、自ら考え、判断し、行動していく態度を培うことが大切である。

そこで私達、特別活動研究部会は、生徒一人一人が自ら目的意識を持って物事に取り組み、自主的、実践的な活動を積み重ねることによって、この課題解決を図ろうと考え、研究主題を「生徒が主体的に活動し、互いに高めあえる特別活動」とし、生徒会活動と学級活動の研究実践から本主題に迫った。

Ⅱ　第１分科会
「生徒会組織間の有機的な連携を図り、生徒一人一人の意欲を高める指導の工夫」

１　副主題設定の理由

生徒会活動は、全生徒のもつ問題意識や意見を反映した、自発的、自主的な活動が展開できるような組織を基盤として成り立つのが望ましい。

しかし、生徒会活動の具体的な実践活動を推進する各種委員会は、もっぱら担当教師の主導のもとに個々独立して活動する傾向にあり、学校全体で組織的な連携を図りながら活発に展開することが少ないのが現状である。

その結果、生徒一人一人の意見が反映されにくくなったり、例えば、学級の問題を全校規模で取り上げ改善していく機会を見いだすことができないといった問題が生じており、生徒の中には、生徒会活動の必要性を感じながらも、自ら積極的に関わろうという意欲が失われつつある。

一方、このような状況の背景には、教師側に、生徒会活動の意義・ねらいの共通理解が乏しい、主体性を育てる援助の工夫が少ない、生徒会活動への意識の希薄などの問題もあることは見過ごせない。

そこで本分科会では、生徒会組織間の有機的な連携を深めることにより、生徒一人一人がより多くの活躍できる場を与え、成就感を味わわせ、生徒会活動を活発化させる工夫が必要であると考え、本副主題を設定した。

2　研究の内容

(1)　研究構想図

主　　題

生徒が主体的に活動し、互いに高めあえる特別活動

生　徒　の　実　態

- 生徒会活動への積極的な参加意欲が乏しい
- 各種委員会活動が不活発
- 組織間の連携がとれていない

教師側の現状と課題

- 生徒の主体性を育てる援助の工夫が少ない
- 生徒会活動への意識の希薄
- 共通理解が乏しい

副　　主　　題

生徒会組織間の有機的な連携を図り、生徒一人一人の意欲を高める指導の工夫

仮　　説

生徒一人一人の意見をくみとり、委員会組織間の連携を生かした活動を工夫することにより、生徒会活動への意欲が高まるであろう

研　究　内　容　・　方　法

(1)　研究構想図
(2)　実態調査
(3)　委員会組織間連携の工夫
(4)　活動実践例
- 体育委員会
- 生活委員会
- 放送委員会

研　究　の　ま　と　め　と　今　後　の　課　題

研究の成果とまとめ……今後の課題

(2) アンケートの結果と分析

次のグラフは生徒を対象に実施した生徒会活動に関する意識調査である。（３校　999名）

生徒会活動の必要性は９割もの生徒が感じている。一方、生徒会活動への関心・意欲・協力態度のうかがえる生徒は、全体のほぼ半数である。ここからは、必要性を感じながら、もうひとつ積極的にかかわろうとしない生徒の姿が受けとられる。生徒の関心・意欲を高めるための工夫の余地が残されているといえる。

ところで、自校の生徒会活動に対しては、約７割の生徒が「活発である」とみている。しかし、そのうちのほぼ半数の生徒は「一部が活発」と捉えており、それぞれの活動が全校規模で連携することなく、個々独自に活動していることが多いという実態がうかがわれる。

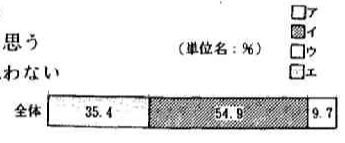
また生徒は、「委員会がお互いに協力しあって活動したほうがよい」（７割）「みんなの意見が反映されたほうがよい」（８割）「学級も協力したほうがよい」（７割）と答える傾向にある。生徒自身は一部の委員会や本部役員だけで個々に活動をすすめるよりも、委員会相互が連携しあい、学級も生徒会活動の基盤となり、さらに生徒一人一人が生徒会活動と密接にかかわることによって、より良い学校生活を送ることができると考えているのである。

したがって、生徒会活動を活性化させ、生徒一人一人の参加意欲を高めるためには、指導上の工夫として、生徒会組織間の有機的な連携を促す方法を取り入れることが必要になってくる。

生徒会活動の意識調査

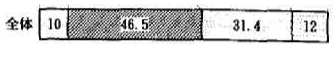
① あなたは学校生活をよりよくするための生徒会（委員会）活動が必要だと思いますか。

ア 絶対に必要だと思う
イ ある程度は必要だと思う
ウ あまり必要だとは思わない



② あなたは生徒会（委員会）活動に関心をもっていますか。

ア とても関心をもっている
イ 多少関心をもっている
ウ あまり関心がない
エ まったく関心がない



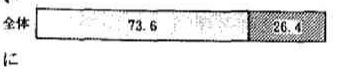
③ あなたの学校の生徒会（委員会）活動は活発に行われていますか。

ア 全体的に活発である
イ 一部の委員会は活発である
ウ あまり活発ではない
エ 活動しているのがわからない

④ 生徒会（委員会）活動がさらに活発になるにはどうすればよいと思いますか。それぞれの項目で、あなたの考えに近いほうを選んでください。

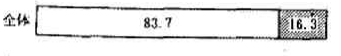
a

ア 委員会がお互いに協力しあって活動したほうがよい
イ それぞれの委員会が独自に活動したほうがよい



b

ア みんなの意見が反映されたほうがよい
イ 本部役員だけで活動について考えたほうがよい



c

ア 委員会の活動は学級も協力したほうがよい
イ 委員会の活動は委員だけで活発に取り組んだほうがよい

(3) 委員会組織間の連携の工夫

ア　生徒会本部役員会の方針のもと、生徒会組織間の明確な流れを作る。
　　具体的には、下表の組織図の流れをもとに活動する。

イ　各種委員会の具体的活動目標を達成させるために各委員会の協力体制を確立する。
　　各種委員会活動の実践と、その反省をもとにして、各委員会で再検討案を作成し、それぞれ協力した活動を実践する。

ウ　教師間の連携を深める。
　　・学年会、職員会議での共通理解を促進する
　　・学級担任教師への協力を依頼する

（生徒会組織間の流れ）

生徒会本部	・前回の反省をもとに生徒自身による学校生活向上と充実のための企画、立案
↓	・生徒会組織間の流れの総括（各学級、各専門委員会間の連絡調整）
中央委員会	・本部提案　各専門委員会、学級への要望
↓	
各専門委員会	・前回の反省と本部提案及び要望を受けて活動方針、内容を検討
↓	
学級討議	・本部、各専門委員会への質問、意見、要望
↓	
各専門委員会	・各学級から出た要望も受け検討
	↓
	生徒総会　・討議、承認
	↓
各専門委員会	・全校生徒への呼びかけ、実施（観察・施行期間）
	↓
↓	・観察、施行期間の反省、改善策の検討
中央委員会	・具体的方策と他の委員会への協力依頼検討 ・本部及び他の委員会への協力依頼、承認と協力の強化
↓	
各専門委員会	・他の専門委員会との有機的連携、全校生徒への呼びかけ、実施
	↓
以後、評価（反省）・実施を繰り返しながら実態にあった活動を深めていく	

(4) 活動実践例

ア．Ａ中　体育委員会 ――― 「ボール貸し出し」の取り組みについて ―――

前期体育委員会の活動方針・活動内容の一つとして、「ボールの貸し出し」が上げられた。本校では、校庭に出て昼休みを過ごす生徒があまり見られなかった。狭い教室でふざけたり、廊下で走り回ったりして、それによる問題点もいくつか出された。そこで、体育委員会が運動など昼休みを有効的に過ごす一方策としてボールの貸し出しを行うことを計画し実施した。その結果、前期体育委員会では下記のような反省点があげられた。

（前期体育委員会の反省）

よかった点	・昼休みに校庭で運動する生徒が増えた
	・校舎内での、ふざけによる事故や怪我も少しずつ減ってきた
改善したい点	・午後の授業に遅れる人がいる
	・ボールの使い方のマナーに欠ける人がいる
	・貸し出しの手続きが徹底できなかった

（後期体育委員会の取り組み）

生徒会本部提案	・反省点をいかし、ボールの貸し出しを積極的にすすめてほしい
	↓
体育委員会としての方針	・生徒手帳によって貸し出しの手続きをする
	・ボールの貸し出しや、使用のマナーについてＰＲ活動をする
	・ボールの貸し出しを活発にするために他の委員会にも協力してもらう
	↓
	・責任をもってボールの貸し出しを継続してほしい
学級討議での意見	・他の委員会にも協力してもらうとは、どのようにするのか
	↓
体育委員会	・学級からの質問、意見に対する検討
	↓
	生　徒　総　会
	↓
中央委員会	＊関係する委員会への協力依頼・学級委員会…昼休みの過ごし方について・放送委員会…当番の確認とＰＲの放送・保健委員会…健康な体づくりＰＲ・生活委員会…午後の授業のチャイム着席の呼びかけ
	↓
	全校生徒への呼びかけ
	↓
	実施（観察・施行期間）
関係する委員会	↓
	観察・施行期間の反省

○本事例の特色

後期体育委員会では、前期体育委員会の反省点を生かした貸し出しを行えるように以下のような活動方針を立て、他の委員会に協力を依頼した。

ア　学級委員会へは、単なるボールの貸し出しにとらわれることなく、昼休みの過ごし方について、生徒が考えられるような場面の設定と工夫をしてほしい。

イ　放送委員会へは、体育委員自身が当番を忘れず、責任をもって活動できるように担当者名の放送とボールの貸し出しのＰＲ放送をしてもらう。

ウ　保健委員会にはＰＲポスターを掲示してもらう。さいわい保健委員会の活動方針の中に「健康な体をつくろう」というＰＲ活動が盛り込まれていたので早速協力してもらえた。

エ　生活委員会へは、午後の授業への遅れが心配されるので、チャイム着席の呼びかけをしてもらうことにしたが、継続的に活動している内容なので、あわせて協力してもらえた。

活動途中ではあるが、観察と調査結果から体育委員が次のような感想をもっていたことがわかった。

- 他の委員会と活動のペースを合わせるのが難しかったけど、保健委員会と放送委員会は私たちと一緒にすすめられてよかったです。
- 体育委員会だけではやりきれなかったことも、他の委員会がカバーしてくれたおかげで無理なくスムーズにできた。
- 前期よりもずっと活発になったと思います。
- 学級委員会や生活委員会も今準備をすすめているから、前期に出た反省点は少しずつよくなっていくと思います。
- これからもっと活動を深めるために、いろいろな新しいアイデアを提案して、協力を呼びかけていきたいです。

今後、生徒に期待することは、

①　自分の所属している委員会が活動している事柄は、委員会独自のものであるという意識から、互いの活動はつながりをもっているという意識をもつ。

②　そのつながりをふまえて、互いの委員会の活動を取り入れる工夫をする。

③　単独の活動よりも、効率的に内容の濃い活動ができることを理解する。

④　連携した活動によって成就感を味わう。

しかし、以下のような課題も残った。

①取り組みに直接関係していない生徒へは、委員会間の連携活動について十分理解させるまで至っていない。取り組みについての紹介ができる場面を多く設定していく必要がある。

②関係する委員会では、それ以外の活動があるため同じペースで進めることができなかった。

③綿密な活動計画と、委員会担当教師・学級担任教師との協力体制を築くことが不可欠である。

④委員会間の連携を生かした活動が流れにのるまでには、ある程度の時間が必要である。

今後さらに、他の委員会との連携をすすめることによって、活動の場面を広げ、活発な活動の雰囲気づくりにもつなげられればと考える。

生徒の委員会活動への考え方や意識が向上することにより、生徒会活動全体が、より活性化していけるよう指導をすすめていきたい。

イ．B中　生活委員会 ―― チャイム着席の取り組みについて ――

（後期の取り組み）

生活委員会　チャイム着席のキャンペーン活動
- 他の委員会と協力してチャイム着席を守れるようにする
- チャイム着席のポスターや標語を掲示し、意識を高める
- 点検活動により啓発活動をしていく

↓

生活委員会　生徒の実態把握
- チャイム着席ができていない生徒の実態把握

↓

中央委員会　生活委員会からの提案・協力依頼
- 生活委員会　チャイム着席の呼びかけと一般生徒へポスターと標語の募集
- 本部役員会　活動のバックアップと全校への呼びかけ
- 学級委員会　授業の準備の呼びかけ
- 美化委員会　机の整頓とゴミ拾いの呼びかけ
- 放送委員会　昼の放送による呼びかけ

↓

各専門委員会　中央委員会で決定した内容を伝え、共通理解と協力体制をはかる

一般生徒　中央委員会で決定した内容を伝え、共通理解と協力体制をはかる
- 朝礼時に、生活委員長から全校生徒に呼びかける
- 学活時に、各生活委員から生徒に呼びかける

↓

関係委員会・各クラス　実施（観察・施行期間）

↓

観察・施行期間の反省
- よかった点
- 改善したい点（活動を見直す必要があるかどうか）

↓

生活委員会　反省をうけて実施内容の検討

↓

以後、評価（反省）・実施を繰り返しながら実態にあった活動を深めていく

○　本事例の特色

生活委員会では、前期生徒総会で「時間で動ける学校にしよう」という目標を掲げ、チャイム着席を守るなどの活動を行った。具体的には、毎時間の点検活動を行ったが、活動が終わると元の状況に戻ってしまうのが現実だった。

そこで、本委員会では点検活動をしなくてもチャイム着席が守られるにはどうしたらよいかを協議・検討した。その結果、本委員会だけの取り組みでは限界があるので、他の委員会に協力を依頼することで目標を達成することにした。早速、生活委員長から、中央委員会を通して下記の内容で協力を依頼した。

チャイム着席キャンペーン活動について

B中学校生徒会　生活委員長

生活委員会では、「時間で動ける学校にしよう」という目標をもって点検活動を行ってきました。しかし、肝心のチャイム着席ができない人がたくさんいます。これでは、委員会の目標はいつまでたっても達成できません。そこで、他の委員会の力を借りて、少しでもチャイム着席を守ってもらおうという「チャイム着席キャンペーン活動」を提案します。ご協力をお願いします。

〈方　法〉　①本部役員会…活動のバックアップと全校への呼びかけ　②学級委員会…授業の準備の呼びかけ　③美化委員会…机の整頓とゴミ拾いの呼びかけ　④放送委員会…昼の放送で活動の呼びかけ　⑤一般生徒…活動のポスターと標語の募集

〈期　間〉　10月4日(月)〜10月13日(金)の2週間

上記の内容で全校に呼びかけた。生活委員会の顧問からも先生方に協力をお願いした。

チャイム着席の状況（1週間の延べ人数の割合）

活動前の席についていない人数（%）は、1年生（15%）2年生（7%）3年生（20%）が、活動中は1年生（5%）2年生（5%）3年生（8%）と約3分の1に減った。

アンケートの実施

各学年1クラス（合計108名）に、以下のような内容で実施し生徒の動きを評価した。

①活動に協力的だったか…83%の生徒が、あまり協力的だったとは思わないと答えた。

②意識して席についたか…71%の生徒が、意識したと答えた。

このアンケートとチャイム着席の状況から以下のことが考えられる。

① 活動に協力的でなかった原因は、関係した委員会の委員長から各クラスの委員へ十分伝わっていなかった。
関係した委員会の顧問と学級担任の協力が十分得られなかった。

② 意識して席についたかは、期間が短かったこととポスター・標語を作ったことで良い結果が出たのだと思う。しかし、後期への委員会の引き継ぎ期間は、また元に戻った感がある。

以上のことから、以下の課題が残った。

① 本部役員会の理解と協力をいかに得るか。

② 教師の指導方針を明確にし生徒指導及び委員会の担当教師間の連携と協力体制を築くこと。

③ 委員会活動は、日常的な活動であるので期間をきめて取り組むものとそうでないものを区別して考えることが必要である。今回の活動は、期間をきめて取り組むよりは、日常的に取り組むほうが効果もあるし、生徒の力にもなるのではないかと思われた。

ウ．C中　放送委員会

―― フレンドリィ・ブロードキャスティングの取り組みについて ――

前年度の生徒総会では、いろいろな要望が放送委員会に寄せられた。例えば、たくさんのアンケートを取ってもっと楽しい放送をしてほしい、一日の生活時間の予定を放送で流してほしい、登下校時を含めて昼の放送以外でも放送してほしい等であった。その中には、取り上げることが難しいものもあったが、生徒はかなり放送の内容に関心を持っており、放送委員への期待も大きいことがわかった。そこで、放送委員会としては、実現可能なものから順次やっていくということにした。

上のような申し送り事項を引き継いで、今年度の放送委員会はスタートしたが、1学期中は成果といえるものもなく、前年度の状況のままであった。

後期の生徒総会では、このことを踏まえて、とにかく皆から親しまれる活動をめざして、「フレンドリィ・ブロードキャスティング」をスローガンに掲げ活動を再開した。

具体的な方針としては、①バラエティに富んだ放送内容　②昼の放送以外の放送の充実　③生徒会組織間の有機的な連携の3つの柱を立てた。特に③の生徒会組織間の有機的な連携に重点をおいて活動に取り組むことになった。

（後期の取り組み）

生徒会本部提案	・盛りだくさんの放送をしてほしい ・学校行事に関する放送をしてほしい ・部活動や生徒会組織の活動を紹介する放送をしてほしい
	↓
放送委員会	・生徒の実態の把握 ―― 具体的な活動内容を決定するためのアンケート実施
	↓
放送委員会としての方針	・委員会としての取り組み内容の検討・決定 ―― より充実した放送を目指すために、他の組織との連携を図る
	↓
中央委員会	・生徒会本部、各種委員会、部活動等への取材協力依頼
	↓
放送委員会	全校生徒への呼びかけ
	↓
	実施（観察・施行期間）
	↓
	反省（次の活動へ）

○　本事例の特色

このような流れをもって活動に取り組んだ結果、具体的には次のような生徒会組織間の連携がみられた。

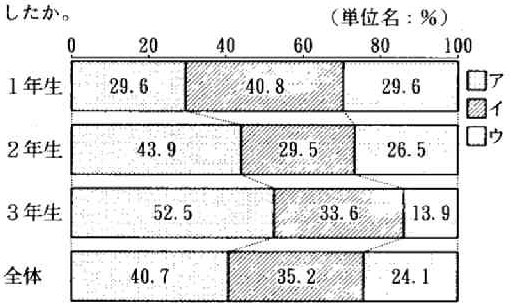
ア　給食委員会との連携では、給食の献立の紹介や栄養についての放送
イ　図書委員会との連携では、本の紹介などの放送
ウ　生徒会本部との連携では、前年度の合唱コンクールの優勝曲の放送
エ　各学級との連携では、各学級の紹介の放送
オ　部活動との連携では、活動内容の紹介や部員の募集などの放送

以上のような活動を通して、どれくらい生徒の間でこの実践が評価されているか、また意識されているかについてアンケートをとることになった。

調査対象　1年生　169人　2年生　132人　3年生　122人　全体　423人

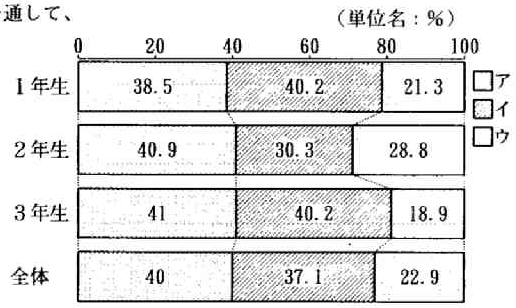
1，1学期に比べて放送委員会の活動は活発になりましたか。

ア　なったと思う
イ　変わらない
ウ　わからない



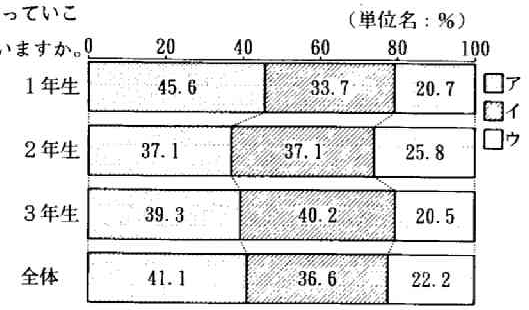
2，給食委員会からの放送や図書委員会からの連絡を通して、生徒会活動が盛んになったと思いますか。

ア　なったと思う
イ　変わらない
ウ　わからない



3，これから各学級の紹介や部活動のＰＲなどをやっていこうと思っていますが、このことについてどう思いますか。

ア　ぜひやってほしい
イ　あまり興味がない
ウ　わからない



上の結果からわかるように、放送委員会が単独で活動するよりも、いろいろな組織に呼びかけて、連携をもった活動の方が生徒会活動の活性化につながることがわかった。そして、各委員会の担当教師の協力や委員会指導の徹底が必要だということが再認識できた。

エ．本事例での活動に対する生徒の感想

A中　体育委員

- 他の委員会の人もボールの貸し出しについて考えてくれるのでよかった。
- 体育委員会の頑張りを皆に知ってもらえた。
- 当番を忘れそうになっても放送でわかるし、生活委員の呼びかけでチャイム着席ができると思う。
- 他の委員会が協力すると、いろんな呼びかけの仕方ができてよいと思う。一つのことしかできないのではなく、その委員会によってやり方が違うのがおもしろい。また、いろんな委員会が協力し合える点もよいと思う。
- 放送委員会の協力によって、友達同士で声を掛け合って外で遊ぶことがあったのでとても良いと思う。
- 保健委員会にポスターをいろんな所に貼ってもらった。もうちょっと目立つところに貼ってもらえるとよい。
- 学級委員会でボールを借りるときのマナーについても呼びかけてもらいたい。

B中　生活委員

- 最初はとても面倒な仕事だと思いました。でも、よく考えれば生活委員として当たり前の仕事だし、そんなに大変なことでもありませんでした。それに、キャンペーン中はみんなも早く席についてくれたし、結果的にはとてもよかったと思います。私は、この活動を通して、生活委員としての自覚がもてるようになったと思います。活動の前は、座ってない人がいても気になりませんでしたが、活動中、またはその後では、少しでも座ってほしいと思えるようになったからです。そして、「学校を、少しでもよく…」と考えられるようにもなりました。
- 前はチャイムがなっても廊下で遊んでいた人が、最近は教室に入ってくれる人が増えてきた。少しだけど、教室の移動のときも遅刻者が減り授業がすぐに始められるようになった。私自身は、先生がくる前に教科書を用意できるようになり、ゆとりをもてるようになりました。

C中　放送委員

- 今までは放送委員だけで活動していましたが、今回他の委員の人と一緒に仕事をしてとてもよかったと思います。ただ単に曲を流して時間がきたら終わる———このようなやり方より、みんなで協力し、給食のコメントを流したりした方が聞いている人達にとってもおもしろいのではないでしょうか。（困った点は、放送時のマナーが守れず、笑ったり騒いだりしていたことです。）
- 私は、部活動紹介の日に担当がまわってきたことがないのでよくわかりませんが、聞いている立場として新しい取り組みはよいと思います。これからも、もっと部活について調べ、この活動を続けたら楽しい放送になるはずです。

  もっともっとみんなに好感のもたれる放送をこころがけたいと思っています。

3　研究のまとめと今後の課題

本研究のねらいは、生徒会活動を活性化し生徒一人一人の意欲を高めるために、どのように生徒会組織間の有機的な連携を図るかにあった。

具体的には、本部役員会を中心とした生徒会組織に、一人一人の生徒がもつ問題や意見を反映できる明確な流れを作ること、また、これまで個々の委員会活動の範囲を越えることのなかった活動へ関連のある他の委員会を積極的に関わらせ、多くの生徒に活躍する場を与えて、全校規模で自発的、自主的な活動を促していくことであった。

そこで、実践課題として、体育委員会の「ボール貸し出し活動」、生活委員会の「チャイム着席キャンペーン活動」、そして放送委員会の「フレンドリィ・ブロードキャスティング」を取り上げたが、その成果をまとめると以下のようになる。

ア　一つの活動に多種の委員会を関わらせることによって、責任を自覚して活動する生徒が増え、みんなで学校を作っているという意識を引き出すことができた。

イ　効果的に活動を進められるようになり、生徒に充実した学校生活が送れるようになったと実感させることができた。

ウ　生徒一人一人の集団生活への参加意識が高まったことにより、生徒会活動にとどまらず、学級活動などにもその意欲が反映されるという波及効果がみられた。

エ　関連する委員会の歩調が合わないと、取り組みの開始などにずれが生じ、まとまった活動へ発展するまで時間がかかった。

オ　複数の委員会が動くことで、それぞれの委員会の担当教師間の連携が促され、指導側の組織の在り方や生徒会活動の共通理解に対して多くの示唆を与えた。

また、今後の課題として次のことが考えられる。

ア　それぞれの学校行事や生徒会の日常的な活動の中で、どの委員会の活動が連携し合えるかを、年間を見通して計画していくこと。また、そのための指導体制をどのように整えていくかという点について、教師側の共通理解のもとに、早期に方針を打ち立てること。

イ　一人一人の意見が反映された生徒会活動を展開するためには、生徒が学校生活に対して問題意識をもってのぞんでいること。また、自分の意見を自由に述べる環境が保証されていること。

ウ　中央委員会が有効に機能しないと、生徒会組織間の連携が中途半端に終わる結果となる。

エ　生徒が活動する時間を計画的に確保し、教師は粘り強く指導にあたること。

これからの生徒会活動をより活発なものにするためには、上記のことをふまえ、指導者である教師の意識の変革を促すとともに、継続的な生徒会活動を実践していくことが大切であると思われる。

Ⅲ　第２分科会「生徒が創意を発揮し、主体的に取り組む、魅力ある学級活動の工夫」

１　副主題設定の理由

学級の係活動などにおいて、生徒たちは教師から指示されたことはきちんと行う。しかし、自分で次の活動を考えたり、主体的に行動することはあまりない。これは学級活動が自分たちの活動であるという自覚と、自発的に企画したり、自ら中心になって活動しようとする意欲に欠けているためではないだろうか。生徒は、学級において自分の能力を発揮し、活動に生かしたいとか、自分のよい点を理解され、他人のよい点を認識したいという気持ちをもっているはずである。そこで、本分科会では、生徒一人一人が自ら興味、関心を持って参加し、その過程で、お互いのよさを認め合うことのできる学級活動が必要だと考えて、本副主題を設定した。

２　研究の内容

(1)　研究構想図

主　　題

生徒が主体的に活動し、互いに高めあえる特別活動

生徒の現状と課題

- 多様な興味、関心を持っている。
- 学級活動に主体的に取り組めず、指示を待つ場合が多い。
- 自己中心的な発想が根強く、お互いを認め合おうとする態度が乏しい。

教師側の現状と課題

- 生徒の興味、関心に十分に応じた学級活動の必要性を感じている。
- 生徒が主体的に活動できる指導、援助の工夫が十分ではない。
- 教師主導型の学級活動に偏りがちな傾向がある。

副　主　題

生徒が創意を発揮し、主体的に取り組む、魅力ある学級活動の工夫

仮　　説

生徒の興味や関心を生かした題材を設定し、グループ単位で学習、発表することなどの活動を工夫させることにより、生徒は主体的に活動し、お互いを認め合う経験をするであろう。このことが、生徒に自信を持たせ、学級活動への参加意欲に結びつくであろう。

研究内容・研究方法

(1)　研究構想図
(2)　学級活動に関する生徒、教師の意識調査と考察
(3)　グループ単位での学習、発表などを取り入れた学級活動の指導計画と実践例
(4)　授業研究の実践と成果
(5)　今回の学級活動の成果と生徒の変容

研究のまとめと今後の課題

(2) 学級活動に関する生徒・教師の意識調査と考察

生徒は学級活動についてどのように考えているのか。友人との関係をどのように考えているのか。現在どのようなことに興味・関心を持っているのだろうか。また教師は、学級活動に生徒の個性や主体性をどのように生かそうとしているのか、実際はどのように感じているのだろうか。これらを教師・生徒双方から調査し、その実態を把握しようとした。

《アンケート結果からわかること》

教師125名と生徒約1400名についてアンケートを実施し、それぞれの現状と意識を調査し、グラフを作成し考察した。

ア　生徒へのアンケート

①「学級活動に積極的に取り組んでいますか」

「積極的」が65％と半数以上が自らを積極的に学級活動に取り組んでいるとしている。

②「クラスの仲間のよいところを見つけるように努力していますか」

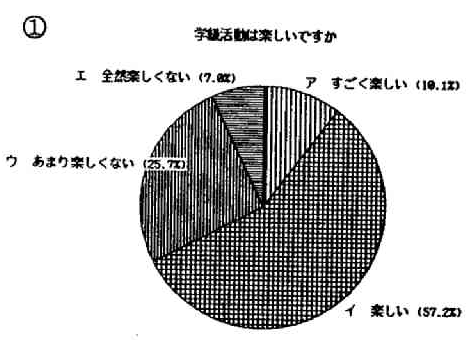
「努力している」→70％近い生徒が、友人を認める努力をしている。

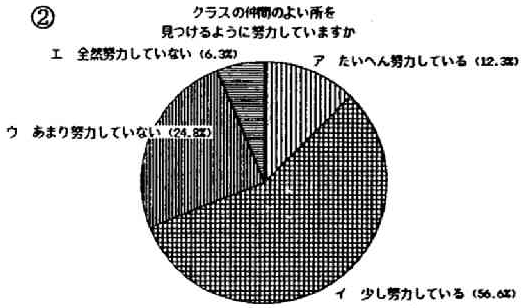
③「係活動や班活動で、どんなときに友達のよい点を強く感じますか」

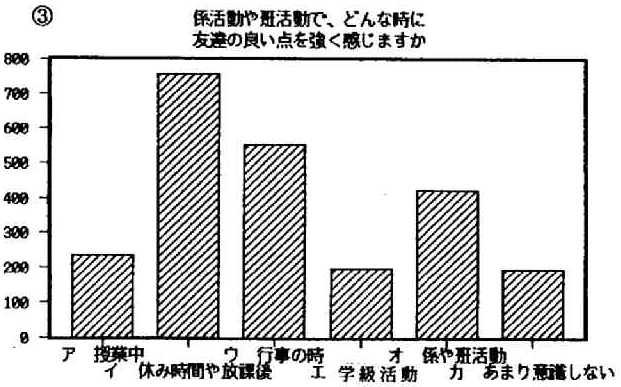
休み時間や放課後、行事のときなどが多い。

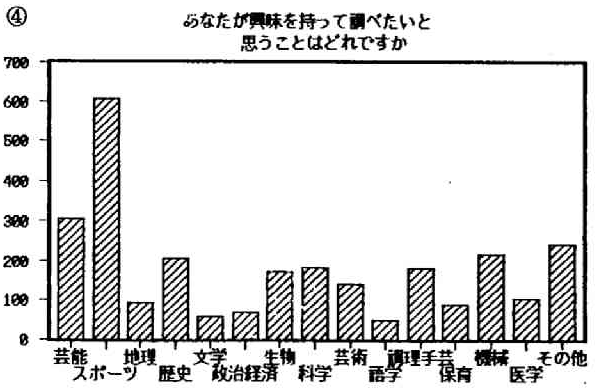
④「あなたが興味を持って調べたいと思うことはどれですか」

スポーツや芸能から語学や文学にいたるまで、生徒は多種多様な興味・関心を持っていることがうかがえる。









イ　教師へのアンケート

①「学級活動を行うなかで生徒の興味・関心を題材にしたものを取り入れる必要があると思いますか」

「思う」が98％と生徒の興味・関心を取り入れる必要性を多くの教師が認めている。

②「学級活動を行うなかで生徒の興味・関心を題材にしたものを取り入れていますか」

「取り入れている」が45％、「取り入れていない」が55％と生徒の興味・関心取り入れる必要性を感じながら、実際には取り入れることの難しさがうかがえる。

③「生徒は学級活動に主体的に取り組んでいると思いますか」

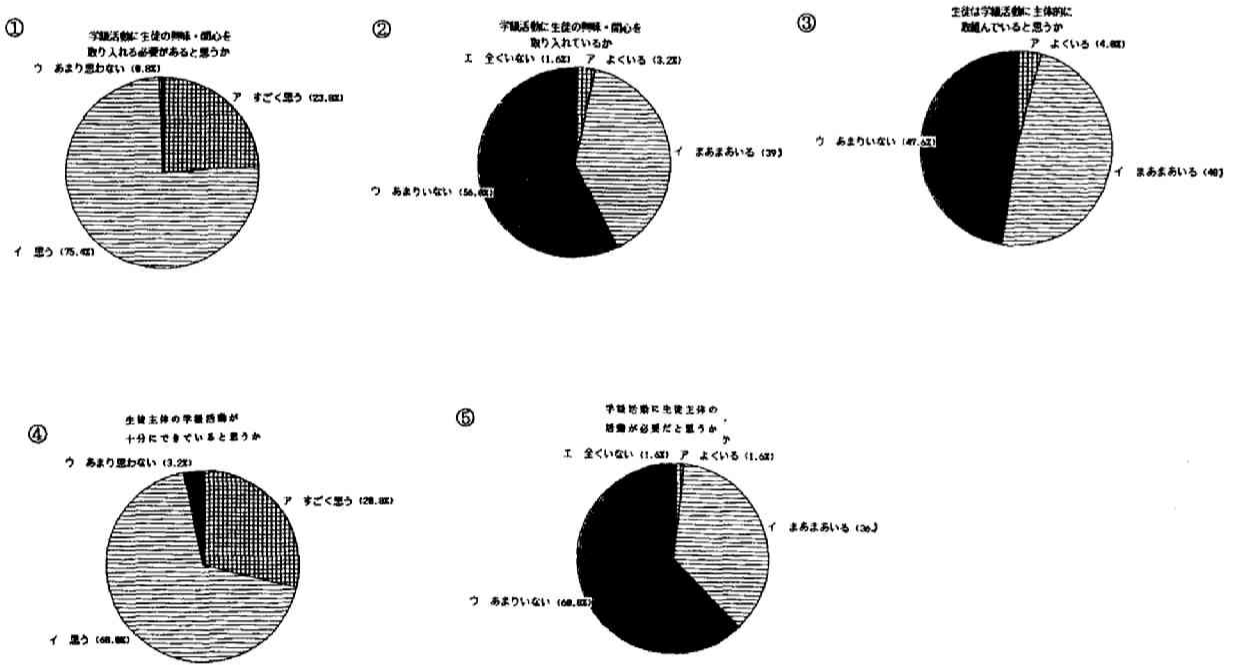
「取り組んでいる」が48％、「取り組んでいない」が52％とほぼ半数ずつに分かれた。

④「学級活動を行う上で生徒主体の活動が必要だと思いますか」

「思う」が97％、「思わない」が３％と生徒が主体的に学級活動に取り組む必要性を教師の多くが感じている。

⑤「学級活動を行う上で生徒主体の活動が十分にできていると思いますか」

「できている」が32％、「できていない」が68％と実際に生徒主体での学級活動の展開が多くないことがわかる。



この２つの調査から、生徒の興味・関心は多種多様である。また、学級の生徒間の関係は個人的なつながりが強く、互いに認め合う機会が仲のよい友人と一緒にいるときや、行事で友人が活躍したときなどに限られ、互いに理解し合えているとはいえない。学級活動については、教師は生徒が感じているほど積極的な取り組みがなされていると思っていない。そして、教師は、生徒の興味・関心を生かした学級活動を展開する必要性を感じながら、題材設定など教師主導型に偏りがちになる傾向にある。こうした現状をもとに、生徒の興味・関心を生かした生徒主体の学級活動を体験し、互いに認め合う機会を設定することが必要である。

(3) グループ単位での学習、発表などを取り入れた学級活動の指導計画と実践例

題材　　「生徒の興味・関心を生かし、主体的な活動を促す」

題材のねらい

- 興味関心のあることに取り組ませることで、主体的に活動させる。
- 班単位で活動させることにより、班員がお互いを理解し、認め合う。
- 発表会を通してクラスの仲間のよさを認め合い、学級としての結びつきを深める。

指導計画：4時間扱い

〈事前の活動〉

- 生徒の学級活動への意識、友達のよいところの認識、興味・関心などについてのアンケートを行う。

＜第1時＞

①意識づけ

- ゲームやクイズを行い（資料1）、学級活動において主体的に活動できていないこと、また仲のよい友達以外のクラスメートのよい点を意外と知らないことに気づかせる。
- アンケート結果を提示して今のゲームで分かった自分たちの実際の意識とのずれに気づかせ、活動への動機づけとする。

②これからの活動内容の提案

- 班ごとに興味あることを調べ発表会を行う。
- 今回の活動を通してクラスメートのよさを知る。
- 実行委員会を組織して主体的に運営する。
- 調査方法、発表方法の例を説明。

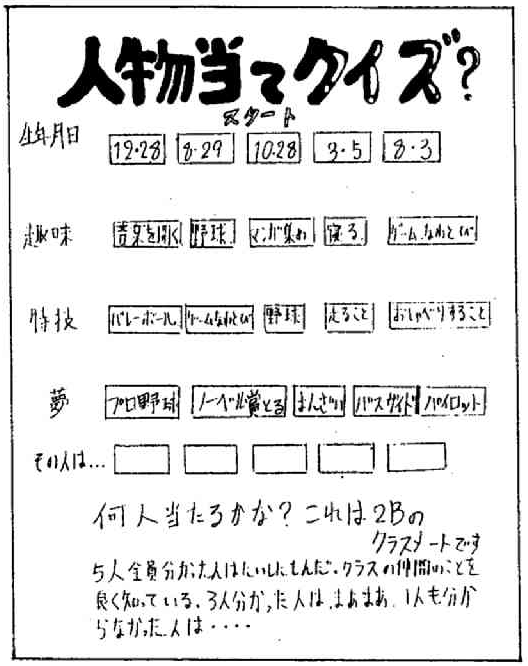
③実行委員の選出

（放課後）

実行委員会

- アンケートにある生徒の興味・関心をもとに発表内容のジャンル分け（資料2）
- 実行委員会活動計画の作成

資料1　　ゲーム例



資料2　　ジャンル分け例

ジャンル	調べる内容
アウトドア	キャンプ・花火・料理・釣り
流行	ダンス・Eい・ファッション・CD・宗教
芸能	芸能界・ディズニー・映画・マンガ
スポーツ	プロ野球・Jリーグ・オリンピック
進路	職業・勉強のち法・受験
生物	植物・動物
言語・文学	読書・友情・恋愛・英会話・探偵推理
情報	テレビ・ファミコン・パソコン・ニュース
自然	水・星座・宇宙・恐竜
機械	車・F1・プラモデル・バイク
社会	戦争・政治・経済・歴史・地理・世界の様子
医学	薬品・保育
日本文化	祭り・建築・すもう
保育	ボランティア・手話

・希望調査用紙作成

（短学活）司会：実行委員会

・活動計画の発表（資料３）

・ジャンル分けを発表し、希望調査を取る。

（放課後）

実行委員会

・希望のジャンルを生かしたグループ分けを行う。

（短学活）司会：実行委員会

・グループ分け発表（資料４）

・テーマの準備の指示

ジャンルの中で特に興味のある事柄について下調べをして企画書（資料５）を作成することの指示。

＜第２時＞　Ｐ20～22参照

①テーマ相談（写真1）

・各自考えたテーマを持ちより、グループで相談して仮決定し、発表する。

②テーマ決定（写真２）

・各班のテーマについて質問し合い、また検討後決定する。

③調査方法・発表方法の話し合い（資料６）

・テーマに応じた方法を考える。

（放課後）

グループごとの活動

・グループ内の係分担

・発表会までの活動予定の立案

・テーマに添った調査研究

・発表会の準備、練習

班長会　　実行委員会主催、教師も入る。

・各グループの進行状況の確認

・各グループの発表形式の把握（時間、方法）

・発表会までのスケジュールの確認

資料３　　活動計画例

①ジャンル分け・希望調査作成
②希望調査を行い班分け
③各自が下調べ
④班で話し合いテーマ決定
⑤班ごとに研究調査・発表準備
⑥発表会
⑦発表会のまとめ

資料４　　グループ分け例

班	ジャンル	メンバー
1	ボランティア	男子５名 女子２名
2	機械	男子７名
3	趣味	男子５名
4		女子５名
5	文化	女子８名

資料５　　企画書例

この企画の提出者２年B組○番氏名○○○○ ジャンル：文化	
テーマ名 音楽	調べる内容（具体的に書く） (1) 音楽の歴史のこと (2) 流行曲について
どうしてこのテーマを調べたいのか（何に役立つのか） クラスのみんなに音楽や歌の良いところをたくさん知ってもらいたいから。	
このテーマを調べる方法 人に聞いたり本を見たりする。カセットを聞いて歌を覚える。	
ひとことPR みんなにたくさん理解してもらうためにがんばる！	

実行委員会

・発表会事前準備

司会者など全体の係分担

プログラムの作成

必要な用具などの準備

・評価方法の検討、記録用紙の作成

＜第３時＞

発表会（写真３）

・実行委員会の司会で運営する。

・グループごとに、調べたことを発表する。

・学級全員に記録用紙を配り、各グループのよかったところ、ためになったところ、アドバイス、質問を記入する。

（放課後）

実行委員会

・記録用紙を集計してまとめ、自己評価、相互評価についての準備をする。

（短学活）

・質問事項を各グループに知らせる。

（放課後）

・各グループは質問の答を用意する。

＜第４時＞

発表会のまとめ

・記録用紙の集計をクラスに発表する。

・質問を受けたグループは、クラス全体に答える。

・活動に対する自己評価・相互評価を行う。

・学級活動に関する意識変化についてアンケートを行う。

（放課後）

実行委員会

・アンケート集計

・今回の活動のまとめ

資料６

〔調査方法例〕

・図書館などの文献　・新聞、雑誌

・訪問　・インタビュー

〔発表方法例〕

・模造紙　・寸劇　・録音　・OHP

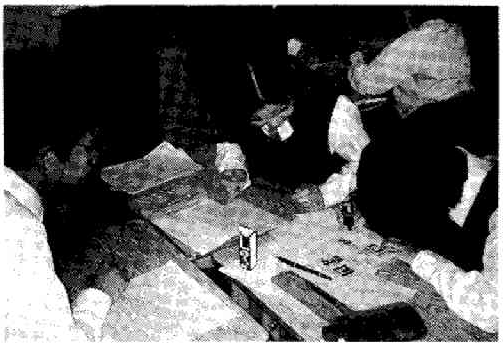
・写真　・物品展示　・プリント

・紙芝居　・CDを流してDJ風

・ディベート　・インタビュー

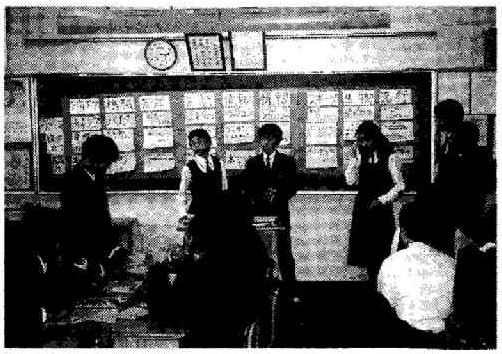
・クイズ

写真１



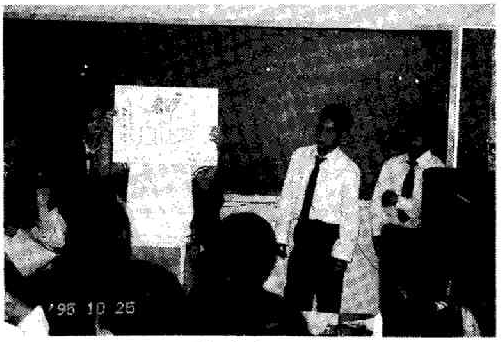
テーマ相談

写真２



テーマ決定

写真３



発表会

(4) 授業研究の実践と成果

ア　授業研究の実践

①　題材　「生徒の興味・関心を生かし、主体的な活動を促す」

②　活動のテーマ「各グループで発表のテーマや役割分担を決め、発表方法を考えよう」

③　活動のねらい

・班中心の話し合いからテーマを自分たちで決め、自主的な活動を行う。

・グループでの話し合いや活動から他の人のよい点を認め合う。

・発表内容・発表方法を工夫し話し合うことで各自の創意を発揮し、主体的な活動を行う

④　活動の過程

〈事前の活動〉

a　生徒の学級活動への意識、友人のよいところの認識、生徒の興味・関心などについてアンケートの実施。

b　アンケートの結果を提示し、活動への動機づけ、提案、実行委員の選出。

c　実行委員による活動案の作成、発表内容のジャンル分け、グループ分け。

d　グループの決定、グループによるさらに細かいテーマの相談。

e　生徒それぞれ発表したいテーマについて企画書の作成。

〈本時の活動〉

a　事前に各自で調べてきた発表したいテーマの発表。

b　グループ討議によるテーマの決定。

c　発表方法、調査方法の検討。

⑤　本時の展開

学習の流れ	活　動　の　内　容	指導上の留意点
活動のはじめ	司会から話し合いの進め方の説明を聞く。	あらかじめ各グループのジャンルをまとめたプリントを配っておく。
	班長の司会で各自が調べてきたテーマについて発表する。	企画書に基づいて発表する。
活動の展開	発表されたテーマについてグループで話し合い意見、感想を発表し、テーマを決定する。	カードを使って前の黒板に張る。
	各班のテーマについて実行委員が質問をし、それを受けて更に各班で検討する。	お互いのよい点を認め合えるよう確認する。

	他の班に調べてほしいことの要望を出す。 決定したことを班長がまとめる。 決定したテーマに従い調査方法、発表方法を話し合う。	全員が話し合いに参加しているか観察する。 例を示し、イメージを膨らませる。
活動のまとめ	司会がまとめを行う。 教師による助言、まとめを行う。 実行委員が今後の予定を連絡する。	話し合いから得たことを今後の活動に生かすことの重要性を理解させる。

⑥　評価の観点

a　自分たちでテーマなどを決めることにより主体的な活動を目指せたか。

b　班で話し合うことにより他の人のよい点を理解する意欲を高めることができたか。

c　発表内容、発表方法や調査方法などの話し合いを通して、各自が自分の創意を生かして取り組めたか。

⑦　今後の活動

a　班の中で役割分担、係分担などを行う。

b　放課後の時間などを使いテーマについて調べる。

c　班長会を行い各班の進行状況、情報交換を行う。

d　全員が本来の目的通り、個性を生かし自主的に活動しているかを定期的に評価、反省する。

e　実行委員は発表会にむけて準備を行う。

f　発表会を終えてからの評価について準備する。

イ　授業研究の成果…生徒の感想から

〈主体的な活動〉

「自分たちでいろいろなことを考えたり、話し合ったりするのはとても楽しかった。」

「みんなの趣味や考えていることが分かって、いろいろなことに興味がわき積極的になれそうです。」

「実行委員の人がすすめる学活はいつもより楽しく感じられた。」

以上の感想から、生徒が楽しく、主体的に活動できたことが分かる。また、話し合いのなかで友人と主体的な深い関わりをもてたことも分かる。

〈良い点の理解〉

「みんなのよいところ、悪いところも見つかりました。よいところを見せてくれた人の真似をしたいです。」

「実行委員の人が一生懸命頑張っていてかっこよかった。」

以上の感想から、生徒が素直に友人のよい点を認め、そのよい点を積極的に自分に取り入れようとしていることが分かる。

〈創意を生かす〉

「すごく難しいことを考えようとする人がいてすごいと思った。」

「自分の興味のあることを調べるので楽しみです。いろいろな工夫をして楽しい発表会にしたいです。」

以上の感想から、今回の活動は生徒の興味・関心を引きだし、創意工夫をしようという意欲をもたせていることが分かる。

(5) 今回の学級活動の成果と生徒の変容

ア　成果

①学級活動後のアンケート

- 「自ら進んで活動できた」と答えた生徒は75％を超えており、積極的に取り組んだ生徒が多かったことがうかがえる。
- 「グループの中で自分の意見が発表できた」と答えた生徒は、70％を超えている。しかし、この項目に対しては、あまりできなかったと感じている生徒も少なくなかった。
- 「グループの中で自分の役割を果たせた」と答えた生徒は80％近くに達し、任されたことに対してはよくできたと思っている生徒が多かった。
- 「友達と協力できた」と答えた生徒も75％を超えており、友達のよいところが分かったと感じている生徒も多かった。

②生徒の感想

〈自己の変容〉

- いつもは、ふまじめだが今回は一生懸命にやった。
- 協力する大切さが分かった。
- やればできるという自信が持てた。
- みんなで調べる事がとても楽しいと思った。
- 班の中で自分の役割をしっかり果たすよう努力した。
- 他の人が自分の意見を真剣に聞いてくれてうれしかった。

〈お互いを認め合う力〉

- どうやったらみんなに分かりやすいかいろいろな案を出して考えた。
- 友人の意外な一面が見られた。
- 自分と違う考えの人がいることがよく分かった。
- 休んでいた人のことも考えて手伝ったりした。
- 『手話の発表』を見て自分もやって見ようと思った。
- あまり話したことがなかったけれど分からなかったところを教えてくれたりして頼りになる人だと感じた。

〈活動を通しての感想〉

- この活動によって班の中がまとまってきた。
- またこのような発表会をやりたい。

イ　生徒の変容

①成果が見られた点

・活動の中で各グループに質問をする時間を設けたが、これによってグループ相互の活発な意見交換が行われ、その後の活動が活性化された。
・共通の興味・関心をもとにグループを構成したが、活動が進む中で自分と違う意見を持つ人もいたが、お互いに認め合い、協力していこうとする姿勢がつくられていった。
・クラス全員の前で発表することによって自信がついたと感じる生徒が多かった。
・他のグループの発表を見て、さらに工夫しようとする姿勢が見られた。
・学級活動に対して魅力を感じ、クラスのために何かしようという雰囲気が生まれ、係活動での新しい活動が始まった。
・発表方法を検討していく上で他の人に分かってもらおうといろいろな角度から工夫し、創意を発揮しようとする姿勢が見られた。
・グループ活動の中で自分の役割を果たそうとする責任感が育ってきた。
・教師自身が活動の過程で生徒の能力や適性を再発見することがあり、今後の指導の大いなる糧となった。

②改善を要する点

・実行委員会を組織して全体の運営を計画、実践していく上で実行委員の負担が大きくなった。
・グループによっては班員の構成がうまく調整ができなくて、一部の人に負担がかかってしまった。
・生徒主体の活動を進めていく上で準備や指導・助言のための時間がかかることも現実である。

③改善方法

・班長会や実行委員会の活動に対して教師側の粘り強い援助が大切である。
・実行委員の話し合いや各グループ活動についての指導・助言のための時間を確保することが必要である。

④学習発表会を終えての生徒の変容

「学習発表会が楽しかった」と感じた生徒は90％近くに達した。学習発表会の前後に実施したアンケートの結果を比較して見ると

・「学級活動に積極的に取り組んでいますか」の問いには「積極的」と答えた生徒は、65％から75％に増え、学習発表会の活動を通して積極的に活動する生徒が増加したことがうかがえる。
・「友達の良いところを見つける努力をしたか」については70％近くから77％に増えている。
・「どんな時に友達の良いところを感じるか」については、今まで他の人のことに無関心であった生徒が意識していこうとする割合が増えてきている。
・今後の活動についてはスポーツ大会や発表会などを企画し、自ら進んで活動していきたいという声も多く挙げられている。

3　研究のまとめと今後の課題

本分科会においては、教師主導型に偏りがちな傾向にある学級活動を、生徒の興味や関心を生かした題材を設定し、グループ単位で学習・発表する活動を取り入れた。このことにより、生徒は主体的に活動し、お互いを認め合う経験をする中で生徒に自信をもたせ、学級活動への意欲に結びつく工夫を行った。

(1)　研究のまとめ

ア　主体的な活動

生徒の代表に学級活動の計画や運営を任せることによって、その活動意欲が高められることが実際の活動の様子や感想の中に見られた。生徒だけで、実行可能な計画を立て、実際に運営していくことは容易でないことも現実である。しかし、学級担任は助言援助者に徹し、できるだけ生徒が主体的に活動するよう援助することが必要であると考え実践した。また、各テーマ毎に小グループに分かれ活動したことで、生徒は、責任をもって行動することができた。さらに、生徒の興味や関心をもとに題材を設定したことで、いつもより積極的に主体的に活動することができた。以上のことから、今回の活動は生徒一人一人の学級活動への参加意欲を高めるための有効な手段になり得たと考えている。

イ　お互いを認め合う経験

生徒は、ごく親しい友達以外は認め合えず、狭い範囲の友達のことしか知らない状態であった。今回の活動を通して、ふだん見ることのできない級友の姿を見ることにより、お互いのよい面を確認することができた。このことが、今後の生徒同士の関係をよりよいものにしていくと考えられる。さらに、このことが生徒に自信をもたせ、学級活動への意欲に結びつくと考えられる。

ウ　魅力ある学級活動

生徒は、学級活動を日直の仕事や係活動などを行うこととととらえがちで、当初は自分たちの興味や関心が学級活動の中に生かされるとは考えていなかった。今回の活動を通して、生徒は積極的に自分たちの関心のあることを調べ、発表にも創意を発揮し工夫をこらしていた。そのため、自分たちでやり遂げたのだという成就感にあふれていた。生徒は、興味や関心を生かした活動に魅力を感じ、積極的に取り組もうとしていた。このことから、今回の活動は生徒一人一人の学級活動への関心を高めたと考えている。

(2)　今後の課題

生徒一人一人が主体的に活動し、お互いを認め合う経験をさせるためには、中学校３年間を見通した継続的な指導が必要であるが、今後の課題として、次のことが挙げられる。

ア　今回の活動が単発で終わることなく、今後に生かされるように継続的な活動を行い、いろいろな方法を模索していく必要がある。

イ　学校行事とのかねあいを考え、生徒の活動に時間的にも無理のないように計画する。

ウ　合同学級活動などにより、各担任の特性を生かした指導を工夫することにより、より充実した活動も期待できる。

以上のことを考え、よりよい活動ができるように、私たち教師の姿勢も含め、今後さらなる研究をしていきたい。